令和７年度　牛隈小学校　研究主題

主体的に学び、自分の考えを表現する児童を育てる算数科学習指導 ～生徒指導の実践上の視点を生かした授業展開を通して～

１　主題設定の理由

（１）児童の実態から

本校の児童は、明るく活動的であり、課題に真面目に取り組むことができる児童が多い。一方、間違いを恐れ、進んで考えを発表できなかったり、分からない問題に対して投げ出したり、１時間を通して集中力が続かなかったりする子が多い。

令和４年度全国学力・学習状況調査の児童質問紙の結果を見ると、「５年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか。」という内容についての肯定的回答は、７９％であり、県や全国平均とほぼ同じであった。しかし、「算数の問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えますか。」の内容について、肯定的回答が７３．６％で、全国平均よりも、約７ポイントも低い。また、「算数の勉強は好きですか。」の内容についての肯定的回答は４７．４％で、これは全国平均よりも１５ポイントも低い結果であった。このことからも、算数への興味関心が低く、粘り強く取り組むことに課題があると言える。

令和４年度福岡県学力調査の算数の結果を見ても、正答率が４３％と県平均を２０ポイントも下回る結果であった。四分位層におけるＣ層及びＤ層の割合は、７割を超えており、低学力層が非常に多いうという課題もある。

このような実態から、算数が得意な子などの一部の児童だけでなく、学力的にも厳しい児童も含めたすべての児童が参加する授業の実現を目指していく。そして、児童が主体的に学びに向かう姿を目指すために、これまでも授業の中で大事にしてきた「生徒指導の実践上の視点」がより重要であると考えた。そして、児童の興味関心が低く、苦手意識が強い算数科の授業実践を核とし、校内研究体制を確立し、組織的・継続的に日常の授業改善を図っていくことは大変意義深いと考える。

（２）嘉穂中校区の研究及びこれまでの研究の経緯から

第５次嘉麻市アクションプランでは、中学校区を単位として研究を実践し、小中一貫教育への取組を推進していくことが示されている。嘉穂中校区では、小中一貫教育推進協議会の中に研究部会を設け、校区における研究の在り方について協議を重ねていった。その中で、「主体的に学びに向かう力」、「自分の考えをつくる力」を校区の共通課題、「主体的に学び続けようとする児童生徒」、「課題に応じ、自己判断できる児童生徒」、「自分の考えを論理的に表現できる児童生徒」を９カ年で目指す児童生徒像と定めた。各学校の研究構想について意見交流をしたり、研究授業を参観し合ったりしながら、校区での研究を進めていった。

本校は、昨年度「算数科における学びの基礎基本を身につけた児童の育成～考えるための技法を活用した学び合いの工夫を通して～」という研究主題のもと、研究を進めていく中で一定の成果はあった。しかし、上記の（１）で述べたように児童の実態として多くの課題が残った。そこで、校区の研究や児童の実態等を勘案して、今年度本主題を設定することにした。

（３）国の動向から

学習指導要領総則には、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が示されており、子どもたちが学ぶ意義やよさを実感しながら，仲間や自己と対話し，主体的に学習に取り組んでいくことができるような授業づくりの重要性が述べられている。受け身の姿勢で知識・技能を吸収していくのではなく、既有の知識・技能を生かしながら問題解決に向けて粘り強く学びを進め、自分の考えを表現する児童を育てていくことが重要であると考える。

また、令和４年１２月に生徒指導提要が改訂された。その中では、「生徒指導は、学校の教育目標を達成する上で重要な機能を果たすものであり、学習指導と並んで学校教育において重要な意義を持つもの」とされている。また、生徒指導の自己指導能力の獲得を支える生徒指導では、多様な教育活動を通して、児童生徒が主体的に課題に挑戦してみることや多様な他者と協働して創意工夫することの重要性を実感することの大切さが記されている。これまでの自己指導能力育成の３つの留意点に加え、児童生徒一人一人が、個性的な存在として尊重され、学級で安全かつ安心して教育を受けられるように配慮する必要があることを「安心安全な風土の醸成」として明記している。さらに、生徒指導を「発達支持的生徒指導」「課題予防的生徒指導」及び「困難課題対応的生徒指導」の３分類とした。特に、「発達支持的生徒指導」の推進が重視され、日々の教職員の児童生徒への挨拶、声かけ、励まし、賞賛、対話、授業、行事等を通した個と集団への働きかけが大切とされている。

以上のことからも、本研究主題は、学習指導要領が掲げる「主体的・対話的で深い学び」という授業改善の視点及び改訂版「生徒指導提要」の内容に直結するものであり、大変意義深いと考える。

２　主題の意味

（１）「主体的に学び、自らの考えを表現できる児童の育成」について

学習指導要領算数編には、算数科における学びの姿として、「児童自らが、問題の解決に向けて見通しをもち、粘り強く取り組み、問題解決の過程を振り返り、よりよく解決したり、新たな問いを見いだしたりするなどの「主体的な学び」を実現することが求められる。」とある。

また、文科省「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」では、「主体的に学習に取り組む態度」について、「単に継続的な行動や積極的な発言等を行うなど、性格や行動面の傾向を評価するということではなく、知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身につけたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価することが重要である。」としている。

以上のことと本校の児童の実態を鑑みて、本主題における「主体的に学び」を、「子どもが学習問題やその解き方に興味をもち、（数学的見方・考え方を働かせ、）進んで解き方を考えたり、試行錯誤しながら粘り強く解決したりしようとする姿」、「積極的に自ら自分の考えを伝えたり、学習した内容を自分の言葉で表現したりする姿」とする。

「自分の考えを表現する」とは、疑問に思ったことや形成した考えを図や式といった数学的表現を用いて、視覚化したり、発表（説明・つぶやき）したりすることである。本主題では、「分かりたい」「解きたい」という気持ちの下で生まれた「考え」は、問題の解決に向かって有効に働くものであるととらえ、的外れや不十分である考えも含めて、「自分の考え」とする。

「表現する」とは、課題を解決する過程で子どもたちから表出される全ての表現を指す。具体的には、中原忠男の５つの表現様式（現実的表現、操作的表現、図的表現、記号的表現、言語的表現）を参考に、下表のようにとらえる。

・ 算数の問題に出会った時に，気付いたことをつぶやく。
・ 既習事項と関連付けて、思い出したことや以前学習したことをつぶやく。
・ 分からないことをつぶやいたり、友達に尋ねたりする。
・ 実物や半具体物を用いて、操作する。
・ 図・表・式などを使って、ノートなどに考えを表す。
・ 周りの友達に説明をする。

また、授業で分かったことや感じたことを自分の言葉で書き表すことも含まれる。

（２）生徒指導の実践上の視点を生かした授業展開を通して

「生徒指導の実践上の視点」とは、生徒指導提要（改訂版）にもあるように、一人ひとりの児童をかけがえのない存在と捉え、個性や独自性を尊重する「自己存在感の感受」、自他の個性を尊重し、相手の立場に立って考え、行動できる協力的な人間関係を築く「共感的な人間関係の育成」、自ら考え、選択し、決定し、行動する経験が得られる機会を設定する「自己決定の場の提供」、お互いの個性や多様性を認め合い、安心して授業や学校生活を送ることができる風土をつくる「安全・安心な風土の醸成」の４点である。

「生徒指導の実践上の視点を生かした授業展開」とは、「自己存在感の感受」、「共感的な人間関係の育成」、「自己決定の場の提供」の３点を意識した具体的な手立てを授業の中に位置づけていくことである。児童の実態や授業場面などを踏まえて、教師が意図的に仕組む授業を展開していくことを意味している。なお、「安全・安心な風土の醸成」に関しては、教職員のみならずスクールカウンセラー等の協力も得ながら、教育課程内外の全ての教育活動において進めていく。

３　めざす児童像

（１）学習問題やその解き方に興味をもち、「解きたい」「考えたい」と思う子
（２）進んで解き方を考えたり、問題の解決に粘り強く取り組んだりする子
（３）友達との関わりや学び合いを大切に、自分の考えを表現する子
（４）学習した内容や感想、学びのプロセス等を自分の言葉で表現することができる子
※今年度の重点「振り返り活動」の充実

４　研究のねらい

（１）研究の目標

算数科において、主体的に学び、自分の考えを表現できる児童を育成するために、生徒指導の実践上の視点を生かした授業展開に着目し、本校児童の実態に応じた有効な手立てを究明する。

（２）具体的な方途

算数科において、主体的に学び、自分の考えを表現する児童を育てるために、教師側が、生徒指導の実践上の手立てを明確にし、授業を行う必要がある。そこで、以下のような具体的な方途を実践例として挙げ、本校における有効な手立てを追究していく。

【着眼１】自己存在感の感受

授業において、児童が「自分が関わっている」「自分が必要とされている」「自分も大切にされている」という思いをもたせ、自分を肯定的に捉える自己肯定感や、認められたという自己有用感を育む工夫を行っていく。

《指導例》

〇子どもの考えをもとに、めあてを設定する。

問題提示などにおいて、子どもの素朴なつぶやきを取り上げ、それをもとに共通の問いをもたせ、めあてとしていく。

◇算数の授業における気になる児童に対して、積極的に関わる。

机間指導の際は、まず学力が厳しい児童や配慮が必要な児童の様子を観察し、必要に応じて声をかける。分からずに困っていることを支援することに加え、問題を速く丁寧に写したり、自分の考えをノートに書いたり、友達に伝えたりしている様子を見逃さず、認めたり褒めたりすることを大事にする。

〇児童の考えを把握し、授業のどの場面で、どの児童を生かすことができるのかを考える。

教師は、児童が考えをもつ場面や友達と話し合っている場面において机間指導を行い、必要に応じて座席表にメモをする等を行い、児童の考えを把握する。そして、全体交流の際に、子どもの発言を必要なタイミングにおいて取り上げたり、発表を促したりする。

◎自分の考えをみんなの前で発表する場を設定する。

問題解決の見通しを出したり、**ホワイトボード**や**直接黒板**に考えを書いて説明したりする場を設ける。**※まなボートの活用**

〇だれの考えか分かるように**ネームプレート**を活用する。

児童が発言したことを黒板に記録する際に、ネームプレートを貼り、だれのどの発言かを明確にする。また、発言しなかった児童に対しても、自分の考えに近いと思うところにネームプレートを貼らせることで、自分の考えを意思表示することができる。

〇つまずきや誤答も、課題解決の方法を思考する上で、みんなのためになったことを評価する。

つまずきや誤答に対して、意図的に取り上げ、それを否定的にとらえずに、肯定的にとらえるような声かけをしたり、みんなにとって良い学びであったことを伝えたりする。

【着眼２】共感的な人間関係の育成

授業において、一人一人が受け入れられたり、自由に発言したりできる雰囲気づくりを行う。お互いに教え合ったり、励まし合ったりするとともに、友達の良さを発見したり、認めたりする場を位置づけていく。

《指導例》

◎課題解決に向けて、教え合いの場面を設定する。

ペア学習やグループ学習のみならず、分からずに困っているときに、「分からない」ということを意思表示し、友達のノートを見たり、友達の考えを聞いたりすることができる「一人学び＋（プラス）」を位置付ける。

〇児童のつぶやきや発表を、共感的に受け入れる。

教師自身が発言している子に対して、うなずきや相づちで応えるようにする。また、発言者だけに注目せずに、全体に目を向け、友達の発表に対してうなずいたり、反応したりしながら聞いている子を褒めて価値づける。

〇友達の考えを理解したり、認めたりする活動を取り入れる。

自分とは違う友達の考えに対して、「どうしてそのように思ったのかな？」「〇〇さんが、なぜこのように考えたのか分かる？」などと全体に問うことで解釈を促していく。また、ふり返りにおいて、友達の良い考えや関わりなどについても記述するようにし、友達の良さに気づいたり、認めたりしながら学びが深まったことを実感できるようにする。

○児童と児童の思考をつなげて、集団での学び合いとなるようにする。
　発言内容を聞いて、「○○さんの考えにつけ加えて、もう少しくわしく説明できるかな？」「○○さんの考えを、もう一度言葉で言えるかな？」「○○さんが言いたいのは、～ということなんだね（わざと間違える）」などと発言した子や全体に問い返す。**※リレー発表**
○良い姿や頑張っている姿は褒め、好ましくない行為については正す。
　分からなくても必死に取り組もうとしている姿や友達を大事にした温かい姿、自信がなくても自分の考えを発表する姿などを見逃さずに褒める。また、学習に集中できていなかったり、友達を大事にしていなかったりした姿は正すように促していく。

【着眼３】自己決定の場の提供

　授業において、児童が「学習内容」や「学習方法」、「表現方法」などを、自分で考え、判断して、決めて実行できる場面を意図的に設定する。

《指導例》
○教材や問題提示の仕方を工夫し、見通しなどにおいて自分の考えをもてるようにする。
　児童が興味関心をもつような教材を準備したり、問題提示を少しずつ提示したりするなどの工夫を行う。「解きたい」「考えたい」と思わせ、どうすれば解けるのか、答えはどうなるのかなどの見通しを自分で考えさせる。
◎学習方法や学習形態を選択できるようにする。
　複数の解決方法に対して、**自分で取り組みたい方法を選択**できるようにする。また、一人でじっくり考えたいのか、友達と話し合っていきたいのかなどの学習形態も選択できるようにする。
○自分の考えや思考過程が分かるように、ノートやワークシートの取り方を指導する。
　自分の考えを消しゴムで消さずに残したり、友達の考えを書き加えたりと自分で判断させ、ふり返りができるノートになっているか確認し、必要に応じて指導する。
◎自分の考えを**交流する相手や、共に発表する子を選択**できるようにする。
　教師が意図をもって行う「仕組む対話」だけでなく、児童が交流する相手を選択することができる「自由対話」を位置づける。また、全体発表などの場において、一人で発表することに加え、指名された子が一緒に前に出て発表をサポートしてくる子を選び、複数で発表することを認める。
◇学習のまとめやふり返りでは、自分の考えや思いを自分の言葉で表現できるようにする。
　教師が一方的にまとめた言葉をただ写すのではなく、教師がリード文を書いて続きを書かせたり、キーワードを提示してそれを使って書かせたりなどの工夫を行い、児童が自分の言葉でまとめを書くことができるようにし、学びを定着させる。また、ふり返りでは、単なる感想で終わらないように、学びの理解度及び変容やその理由、納得した友達の考えや十分できていないことをどうしていくかの解決方法などを書くようにする。

◇安全・安心な風土の醸成

　児童の個性が尊重され、安全かつ安心して学習に向かうことができ、学級や学校が「心の居場所」になるように組織的に取り組む。

○称賛活動

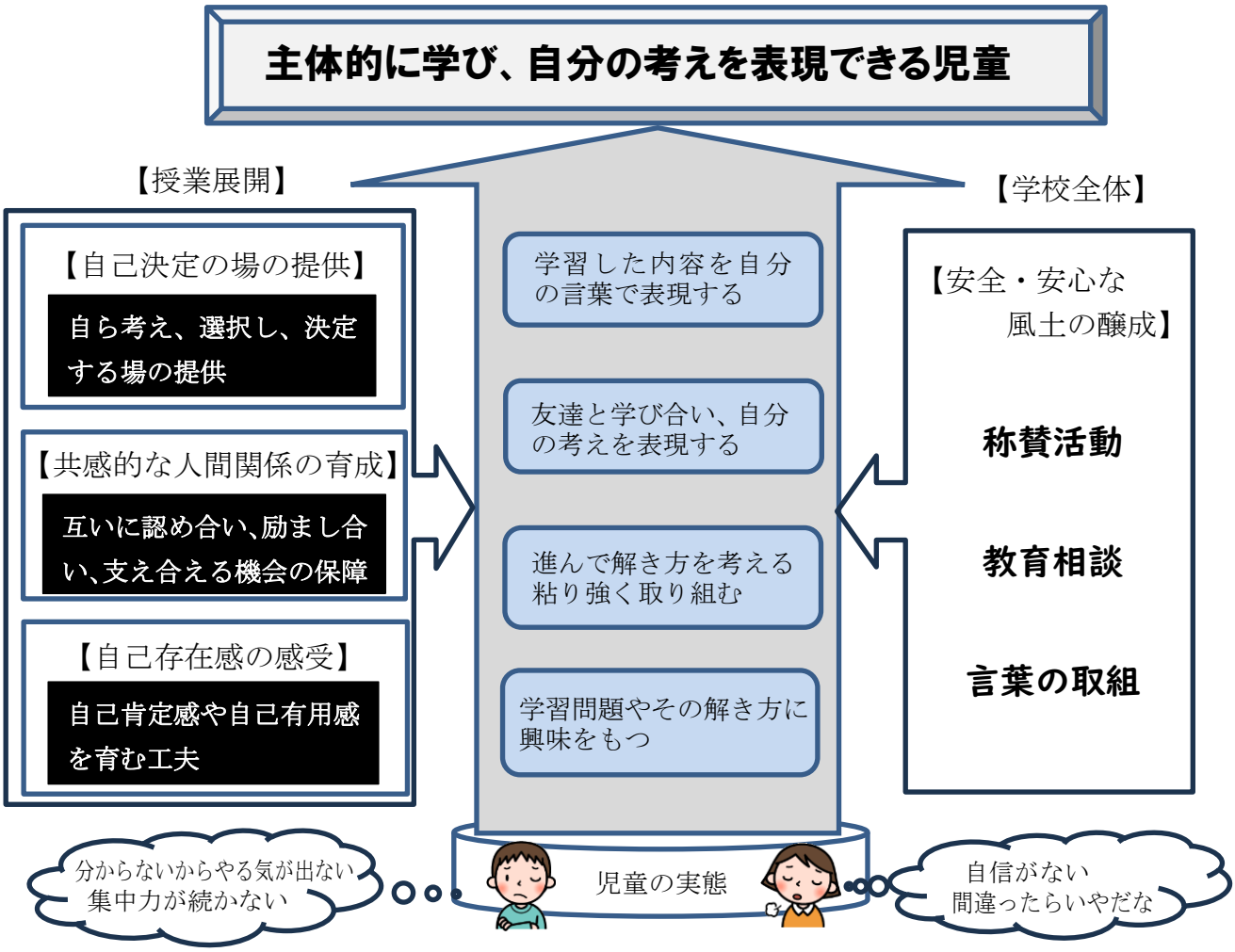
　各学級で「ほめ言葉のシャワー」や「いいところ見つけ」など日常的に称賛活動を行っている。また、校長自ら給食時間に放送で、重点目標である「あいさつ名人」と「自分から名人」につながる姿

や授業を参観しての良い学びの姿や価値ある発言を称賛している。さらに、委員会活動などにおいて児童による称賛活動も行われている。

○教育相談

スクールカウンセラーによる治療的な教育相談に加え、高学年を中心に全ての児童を対象に、予防的・開発的な教育相談を行っている。担任や管理職、児童生徒支援加配、養護教諭等が、児童一人一人と面談し、悩みや体調に加え、がんばっていること、目標などの聞き取りを行っている。聞き取ったことは、その日の放課後に共有し、担任の指導や関係職員の関わり方などに役立てている。

○言葉の取組

言語環境の乱れによるトラブルが多いという課題をもとに、委員会活動を中心に言葉の取り組みを行っている。昨年度に続き、友達の心が温かくなるフワフワ言葉をカードに書き、校舎内に掲示する取り組みを行っている。また、言葉に関する動画を作成し、全校で視聴し、自分が使っている言葉をふり返っていくなどの取組を通して、言語環境を整えている。

５．研究構想図